

おわりに 未来のコンビニ社会に向けて

最後に、私がオーナーの高齢化に着目したことについて、私は「高齢化社会」でのコンビニというものを見据えてはいない。しかし「少子化社会」でのコンビニというものはすでに頭の中にあった。その理由とは、コンビニには子供がいるからである。小学校でクラスの数が減っていることが周知の事実であるように、子供の数は減っているのにもかかわらず、夕方のコンビニにはたくさんの子供がいる。雑誌を買ったり、お菓子や飲み物を買って食べたり、私たちが子供の頃、駄菓子屋でしていた会話を、子供達が同じようにしている。最近流行のカードゲームや人気のゲームソフトを買うのもコンビニである。加えて、小さな子供を持つ母親にとっても便利である。床が磨かれ、きれいであるため、子供が床に寝転んでも服はほとんど汚れない。もちろん大人にとっても便利であることには変わりはないし、お年寄りにとってもきっと便利なのだろうが、子供にとっても当たり前のように便利な存在であることに私は感心していた。ファミリーレストランに子供はひとりでは行かない。子供がメインであるはずの遊園地でさえ、身長制限で乗り物に乗れない子供がいる。そんな中で、唯一コンビニは子供さえもすべて受け入れるユニバーサルな存在であるといってもいい。

彼等はしばしば「コンビニ世代」と称され、私もその世代に属していると思われるが、それは決して批判されるべきものではないと考えている。批判する者達は、そんな自分もまたコンビニ社会に生き、そのコンビニエンスに対価を払ってそれを得ていることに気付いていない。彼等多くの子供がコンビニ世代と呼ばれるのは、ただコンビニが便利であったからだけのことである。

この論文は、ひたすらコンビニの本質の維持を唱えてきた。そのための問題提起と調査、考察、そして対応策の提案を行ったことは、ただコンビニが我々の社会にとって非常に便利なものであり、全世代の人間が大量かつ高品質のコンビニエンスをいつでも享受出来るこのコンビニ社会を未来に繋げていくためにそれが必要なことだと思ったからである。

ここで最初の疑問を振り返ると、「コンビニ行政」の真価は、コンビニ社会の継続がなければ発揮されることはないということがわかる。それはなぜか。あくまでも行政はコンビニの今現在の数量的な面と、コンビニの今現在の利便性のみに着目しているからである。

これから先、何かをコンビニの中で始めようとする場合、今後のコンビニ社会のあり方、つまりコンビニの本質の未来を考慮しなければ、それがコンビニ社会の一端となることから許されない。そう意識しない限り、コンビニもまた絶対にそれを受け入れることはない。顧客コンビニエンスの追求と実践に役立つものでない限り、それがコンビニの未来には必要ではないからである。ただそれだけのことだが、コンビニにとってはそれが最初に解決すべき最重要の命題となり、最善のサービスという最良の解答になる。未来のコンビニ社会においても、そうありつづけることで我々コンビニ世代の人間はそれを享受しつづけるのではないだろうか。

これをもって本論文の結びとする。

